

オーガニックブドウのスマート生産技術開発・標準化による県北での生産拡大と地域活性化

取組企業	企業名：株式会社茨城テック	共同研究 の相手	茨城大学 農学部 附属国際フィールド 農学センター
	担当者：代表取締役 江波戸英明		教授 小松崎将一
	TEL：090-6703-2886		TEL：029-888-8707
	企業HPアドレス： https://ibarakitech.co.jp/		研究室HPアドレス： https://agroecology.agr.ibaraki.ac.jp/

<背 景>

オーガニックブドウ栽培は日本での事例はほとんどなく希少であり、湿潤な日本の気候条件による病気の発生で樹勢低下や収量・品質低下が起きやすい上、オーガニック栽培向きの品種が少なく、栽培が難しいためにオーガニックブドウ栽培技術は属人・属地的であり技術の標準化が難しいのが状況である。

また、ブドウの生産には、苗木を植えてから本格的に収穫するまでに約4～5年と長い年月を必要とするため、ブドウの新規就農者が増えない一つの要因にもなっている。

そこで、本研究では日本でのオーガニックブドウ栽培事例がほとんどない希少なオーガニック栽培40年(あすか農園)の経験と、茨城大学のオーガニックスマート栽培、共生微生物 エンドファイトを活用した新たな農業スタイルに取り組む。今回取り組む農業スタイルは、農薬や化学肥料に頼らない次世代の農業になりうる技術となる。茨城テック内農園にて生産解析を行い、標準化出来る技術を検証することで、生産拡大と地域活性化の課題解決に取り組んでいく。

<研究開発プロセス>

- ①研究開発用ビニールハウス+ブドウ棚設計及び設営、品種の選定
雨よけハウス(ワンタッチトンネル採用)+単管によるぶどう棚設計
品種：シャインマスカット、巨峰、藤稔、トーキョウマスカット
- ②オーガニックスマート栽培技術条件設定
エンドファイト(SK51)を採用し、挿し木と苗木で検証(接種割合9割)
- ③生産解析後、オーガニックブドウ標準化検証
次年度以降検証予定

オーガニックブドウのスマート生産技術開発・標準化による県北での生産拡大と地域活性化

<共同研究機関との取り組み>

茨城大学では、本研究開発のうち生産条件設定を主体的に行った。
過去における有機JAS基準に基づいた栽培の結果を元に、植物共生菌（エンドファイト）種類、腐植培地種類の組合せ、剪定枝や挿し木の栽培条件設定を決めた。



<研究開発結果>

- ①過去における有機JAS基準に基づいた栽培により、オーガニックブドウの生産が確認された。ジベレリン不使用の有機栽培では、品種間で収量や糖度に差が見られたことにより、オーガニック栽培における品種選択の重要性が浮き彫りとなった。
- ②今年度の品種比較試験では、シャインマスカット、巨峰、藤稔、トーキョーマスカットについて、挿し木の成功率や定着条件を評価した結果、シャインマスカットは安定した成長が期待でき、巨峰には改善の余地がある。
- ③定植時期は3月中旬から4月上旬を目安とし、適切な温度・湿度・日光管理が苗木の成長を促進するため、今後は品種別の栽培方法の最適化と挿し木技術の向上、データ駆動型の栽培管理を進め、安定した品質向上と収量最大化を目指す。
- ④持続可能な栽培技術の導入が、将来の高品質ブドウ栽培の確立に貢献することが期待される。